

社会性について

辰 見 敏 夫



○ 社会性とは

人が人として生活するということは、人びとに接して、人のつくりあげているもの（文化）の中で生活することです。その意味で、人は社会的動物である、といつてよいでしょう。生れたばかりの一人かたまりの肉にすぎないような赤ちゃんでも、人の手を借りて、人の作ったたらいの中で、水道の水で産湯を使い、お母さんのお乳をもらって、大きくなります。つまり、生れたばかりの赤ちゃんでも、すでに社会的な生活を営んでいるということになります。もちろん、そうはいっても、おとなの社会生活を営んでいる、ということと赤ちゃんが社会的な生活を送る、ということとは、たい

へんなちがいがあります。だいたい、おとなということのもっとも大きな意味は、「話せばわかる」生活をしているということです。

話をしてもらえないような人びとは、ですから、おとなのつづっているこの社会に入れておくわけにはいきません。たとえば、どろぼう、選挙違反というような犯罪をおかした人たちには、「そういうことをしてはいけない」と話しても、ほんとうはわからないのですから、これは刑務所に隔離してしまいます。つまり、おとなの社会から追いだされてしまうわけです。また、精神的疾患をわずらっている人は、話してもわかりませんから、これも病院にいれて、おとなの世界から隔離して遠ざけてしまいます。

子どももまた、おとなの社会にはいれない存在なのです。そこで、幼稚園、小学校、中学校に入れて、（ある意味では隔離をして）「話せばわかる」おとなにしようとするわけです。

つまり、子どもはおとなの社会の中に生れるけれど、おとなの社会にそのままうけ入れられることはできない、そこで教育をうけ、じょじょにおとなの「話せばわかる」生活に入っていく、そうなる

までを社会性が発達する、というのです。そこで、赤チャンからおとなまでのいろいろな段階で、社会性の発達にはいろいろな特徴があります。

○ 幼児の社会性の特徴

昭和三十一年度の幼稚園教育要領で、幼稚園の幼児は、次の具体的な目標を達成するように指導されなければならない、として、

幼稚園内外における身近な集団生活に適應できるようにする。

○身のまわりの始末が、ひとりですることができるようにする。

○自分の仕事を進んでやり、終りまでやりとげることができるようにする。

○友だちと、仲よく親切に交わるようになる。

○友だちといっしょに、仕事や遊びができるようになる。

○友だちとの約束が守れるようになる。

○親や教師のいうことを、注意して聞くようになる。

○幼稚園や家庭の生活、道路の交通、遊び場などのきまりが守れるようになる。

○自分や友だちの持物、幼稚園の物などをたいせつに使うようになる。

○世の中のために働いている身近の人々に親しみを感じ、その仕事に関心をもつようになる。

○幼稚園の行事、家庭や身近な社会の意義ある行事などに、興味をもつようになる。

○道具や機械の便利なことに気づくようになる。

これが、幼児の社会性について期待される一つの内容であると考えてよいでしょう。そこでこういう期待される内容を実現するには、その社会性の発達において、どういう特徴がみられるのでしょうか。教育要領の社会で、幼児の発達上の特質として、次の十項目があげられています。

○何でもひとりでやりたがるようになる。

○自分のものと他人のものとの区別が、一応できるようにする。

○所有欲や独占欲が強い。

○好きな遊びや作業に熱中する。

○同じことがらに対する注意や興味が長続きしない。

○泣いたり笑ったり、情緒の動揺や変化が激しい。

○集団の仲間にはいれるようになる。

○ひとりに認められたがる。

○模倣的な行動が多い。

○試行錯誤的行動が多い。

こういう心理的特徴が見られればこそ、前述をしたような期待される社会的行動に到達することができるというわけです。

そこで、もっと具体的に、幼稚園ではどういう指導目標をたて、それを実現させるように教育をしているのかをみるために、小川町幼稚園の一例をあげてみます。

3才

一期 園生活に必要な生活習慣を知らせる。園生活に必要な、かんなたなきまりや約束を知らせる。

二期 先生が橋渡しをしたがいに交渉できる遊びをみちびく。

三期 勝手な行動をとることが他人に迷惑をかけることをしらせる。

四期 進級するよろこびと自覚をそだてる。

4才

一期 園生活に必要な生活習慣を知らせる。

二期 遊びのルールを知り、小グループながら、集団行動が徐々にできるようにする。

三期 友だちと協力して遊んだり、しごとをすることを経験させ、その楽しさを味あわせる。

四期 協力してある目的をもったしごとをやりとげるたのしさを得させる。

リーダーシップをとる機会をあたえてその芽をのばす。

5才

一期 在園児は年長組になって、自覚と誇りを各自が身につけて行動できるようにする。

二期 それぞれの友だち関係が安定し、おたがいの気持を深めあうようにする。ボス的な行動がみえた時にはみんなで考え

て、よい方向にもっていく。

三期 グループ遊びやごっこ遊びなどを通して、新しい事象を発見する目を養い、その経験を広げるようにつとめる。

自分のしごとを完成する。

四期 生活経験を更に深め学校への期待をもたせる。

すすんで手つだいなどができるようにする。

ところで、一般には、この発達上の特質としてあげた十項目のよ
うな面を、社会性とよんでいるわけですが、先にあげたような具体的
な幼稚園教育の目標、もっと実際的には、小川町幼稚園の社会的
なものの指導目標というものをよく吟味してみれば、幼児がこうい
う社会生活ができるようになる、という可能性が予想されればこ
そ、それを具体的目標、指導目標としてあげたわけなのですから、
裏返して考えれば、この目標こそは、幼児の社会性の特徴である、
といってもよいでしょう。つまり、小川町幼稚園の例でいえば、
5才の二期頃には、ボス的な行動にでる子どもがでてくるというこ
と、さらに、それをその組の子どもたちが問題として取り上げて、
どうすればよいかを考えることができるようになる、という可能性
があればこそ、それを指導目標として、ボス的な行動がみえた時に
は、みんなで考えてよい方向にもっていく、ということがあげられ
ているわけなのです。逆に考えれば、5才の二期頃の社会性の特徴
はボス的な行動や、それを問題として取り上げる能力がでてくるこ

とだといってよいでしょう。

ですから、発達上の特徴は、この社会性をとくに、その個人の面からとらえたものであり、われわれが一般に、社会性という表現をする場合には、ここにあげた具体的な目標や指導目標の内容であるといったほうがよいといえましょう。

○社会性の内容

社会性ということ、赤チャンの生活からおとなの社会生活をいとなむことができるようになる発達過程であると漠然と定義してきましたが、ここまで考えてみますと、社会性にもいろいろな面があることがわかります。

第一に、人にたよらないで、自分のことは自分でする、とか、仕事や遊びを熱心にやって、おわりまでやり通す、といったような個人生活という面からの社会性があるでしょう。

第二に、先生や仲間の子どもと楽しく遊ぶ友だちに親切にする、というような、集団生活への適応ということが考えられます。

第三に、遊びのルールをまもるとか、順番を待つ、というような社会的なきまりを、たとえそれが素朴なものであっても、まもるという面があるでしょう。

第四に、家庭でお手伝いをするによって母親の役割をしり、行事に参加することによって、社会のしくみをしる、というような社会的な事象への興味や関心、という面が考えられるでしょう。

もつとも、これは理論的におとなの立場から分けてみたわけで、実際に、子どもの行動をみるとときには、それほど厳密に区別し分類されるものではないでしょう。けれど、社会性ということの中には、こういういろいろな面が入っている、ということは注意しなければなりません。また、それであればこそ、社会性の最後の到達すべき点が、おとなの社会生活をいとなむことができるようになる、という定義が下されるわけです。

○おわりに

あれこれと話をすすめていくと、なにか社会性というものが、常におとなの立場からのみ考えられるような印象を持ったかもしれません。が、社会性というものはあくまでも個人の発達の過程なのです。フランスのある心理学者は、社会は個人のうちにある、といっています。この考え方が、社会性の根本的な立場ではないか、と思うのです。

したがって、社会性がばかに画一的な発達をするように説明しましたが、この発達の面ほど個人差の大きいところはあります。その子どものおかれた環境や教育、さらに遺伝によって、社会性は各個人の子どものごとくに、その発達に質的にも量的にも差がでてくるのです。この個人差ということはあくまでも考えておいて、教育していただきたいのです。

(東京学芸大学)